

たまのよこやま

1/964 ～多摩ニュータウンの調査を振り返る～ まとめ 1

令和4年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業 公開セミナー報告

『遺跡・遺物が語るいのり』 3

遺跡だより 台東区 元浅草遺跡 5

あの遺跡は現在?! 新川・島屋敷通り 三鷹市島屋敷遺跡 6

令和5年度 新企画展示のご案内 7

令和5年度企画展示

たま ニュータウン いせき スクラップブック

多摩新街 遺跡切抜帖

開幕!

1 / 1964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。



#55 まとめ

本コーナーの最終回は、当時の調査にも参加していた調査課課長（統括担当）が、多摩ニュータウン遺跡群調査を振り返ります。



昭和20年(1945)の終戦直後には約350万人だった東京都の人口は、戦後復興と高度経済成長の流れの中で昭和35年(1960)に1000万人を超え、極度の住宅難が社会問題となりました。東京都が南多摩地域に大規模団地の可能性を探るべく調査を開始したのがこの頃です。昭和38年(1963)には、「新住宅市街地開発法」という法律が公布され、多摩・千葉・千里(大阪)を対象地域として国策による大規模団地造成計画も動きだしました。その後様々な協議を重ねられた結果、昭和40年(1965)12月、「多摩ニュータウン新住宅市街地開発事業」計画が正式決定に至ったのです。これは、八王子市、町田市、多摩町(当時)、稲城町(当時)の2市2町にまたがる3,000ヘクタール弱の地域に人口30万人の街

を建設しようとするものでした。

一方、昭和25年(1950)に公布された文化財保護法により、造成等によって失われてしまう遺跡の記録保存も義務化されていました。多摩ニュータウン開発にともなう埋蔵文化財の調査も、当然、事業計画の俎上そじょうに上がります。これは約3,000ヘクタールの事業地内にある数多くの遺跡を対象とするもので、世界に類をみない大規模な調査となることは必至でした。その担い手として、開発計画の決定に先立つ昭和40年11月に発足したのが、東京都埋蔵文化財センターの前身である多摩ニュータウン遺跡調査会です。そして、調査会が手始めに行った遺跡の分布調査を実施したところ、243ヶ所もの遺跡が確認されるに至ったのです。これは、当時の予想を大きく上回るもので、後に「遺跡百年戦争」と揶揄やゆされるほどでした。(ましてや最終的な遺跡数が964に増加することなど、誰が予想できたでしょうか!)

開始当初の発掘調査は、どこか長閑のどかで牧歌的で、重機等の活用が進んだ現代の調査とは比べようのないものでした。若き調査員達は「破壊される遺跡の記録保存」というよりも、新たな発見と資料の蓄積に胸躍らせていたようにも思えます。当初は試掘坑で遺構を確認した部分のみを精査する部分調査にとどまる遺跡もありましたが、間もなく調査範囲全体の悉皆調査しつがいが基本となるなど、多摩ニュータウン遺跡の調査は、その過程において、それまで日本の考古学が蓄積してきた調査方法の集約・検証や改良などの場としても重要な意味を持っていました。ここで実践された調査手法は、広く他の地域・団体の調査に資することともなり、今日の行政発掘調査の礎を築く大きな力となったのです。ただ、開発のスピードが増すと共に、遺跡調査もこれに歩調を合わせる事が求められるようになりました。これに対処すべく、昭和55年(1980)に設立されたのが東京都



町田市小山ヶ丘での発掘調査風景（平成元年）



多摩市での発掘調査風景（昭和40年代）

埋蔵文化財センターです。これによって、常時50名以上の調査研究員が、この丘に刻まれた歴史の解明に従事することとなったのです。こうした調査は、平成17年（2005）まで続き、自然公園等で現状保存となった遺跡などを除いて、771遺跡を調査することとなりました。

また、多摩ニュータウン遺跡は、当初、縄文時代中心の遺跡と考えられていましたが、調査が進捗していくと、さらに遡る旧石器時代の遺跡や、古墳時代、古代、さらには中・近世から開発直前まで操業していた炭焼窯まで、この丘陵を利用した様々な時代の生活の痕跡が眼前に現れはじめました。その



八王子市堀之内での発掘調査風景（平成11年）

結果、各時代の人々の暮らしの背景には、これを支える資源の存在が明らかになっていきます。耕作に適した広い平坦地には乏しいものの、丘陵で豊富かつ容易に手に入る水・木・粘土・砂などの天然資源は、人々に多くの恵みをもたらしました。例えば、町田市の多摩境周辺では、縄文時代に土器作りのムラと大規模に粘土を採掘した遺跡が近接して発見されましたが、同じ地区で古墳～奈良・平安時代の窯・粘土採掘坑、さらにはこれを営む人々のムラが発見され、こうした人と丘陵との関係が時代を超えて保たれていたことが明らかになったのです。これほどバリエーションに富んだ内容を有していたこと自体もちろんですが、考古学的な調査がその解明にこれほど寄与できるということが判明したことも大きな発見でした。この他にも多くの成果が得られた多摩ニュータウン遺跡の調査は、関連諸分野や学校教育・生涯学習への活用など、考古学に止まらない大きな貢献を果たすこととなったのです。

東京都埋蔵文化財センターでは、現在も都内各所で様々な遺跡の発掘調査に従事しています。一度調査したら元には戻らない遺跡の情報を、可能な限り精緻で科学的な調査によって後世に伝えるべく日々努力していますが、その根底には多摩ニュータウン遺跡の調査で培った多くの経験と工夫が息づいているのです。
（山口 慶一）



これにて本コーナーは終了となります。ご愛読いただきありがとうございます。

『遺跡・遺物が語るいのり』

「東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業 公開セミナー」は、東京都埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団・埼玉県埋蔵文化財調査事業団による連携事業として、平成20年度から毎年開催しています。セミナーでは、各財団が行った発掘調査や研究の成果を広く皆様にお伝えするとともに、財団の業務や役割についても理解を深めていただくことを目的に、三都県が持ち回りで行っており、今年度は第15回目を迎えました。

今回は埼玉県埋蔵文化財調査事業団の主催で、古墳時代の祭祀（まつり）をテーマに「遺跡・遺物が語るいのり」と題し、令和4年12月4日（日）に埼玉県行田市の行田市教育文化センター「みらい」にて開催しました。行田市は、国宝金錯銘鉄剣が出土した稲荷山古墳をはじめとする「特別史跡埼玉古墳群」で有名ですが、令和元年～2年の北大竹遺跡の調査において、全国最多となる45点もの子持勾玉の出土をはじめ須恵器・土師器・武器類・馬具・模造品など、古墳時代後期の祭祀に用いられた道具が大量に見つかりました。今回は、この北大竹遺跡の成果にちなんでの開催となりました。

セミナーは、テーマの趣旨説明、三都県各財団と行田市教育委員会職員からの基調報告、梶山林継先生（國學院大學名誉教授）による記念講演、そしてミニシンポジウムという内容でした。

基調報告1

藤丸亮介（東京都埋蔵文化財センター）が「石製模造品から見た古墳時代のまつり」という題で、報



藤丸亮介（東京都埋蔵文化財センター）

告を行いました。東京都内における石製模造品を出土する主要な集落・祭祀遺跡を取り上げ、その中から特徴的な遺構・遺物を抽出しました。

そして、古墳の副葬品として出土する石製模造品との比較を通じ、両者の組成や祀る対象の違い、ヤマト王権の祭祀形態からの影響の度合い、子持勾玉の特別な性格について検討しました。最後に、石製模造品の衰退と土製模造品への変化、それに伴う祭祀の変質について論じました。

基調報告2

新山保和氏（かながわ考古学財団）が「神奈川県における古墳時代祭祀の様相について」という題で、報告を行いました。祭祀遺跡の立地・祭祀の対象についての検討から、神奈川県内における古墳時代の水辺での祭祀遺跡の調査事例を紹介し、その様相について考察しました。

その結果、水辺の祭祀遺跡は立地から大きく（1）湧水点遺跡、（2）溝祭祀、（3）湿地祭祀に分けることができ、（1）は典型的な古墳時代祭祀、（2）（3）は古墳時代から古代にかけてみられるものと位置付けました。

基調報告3

古間果那子氏（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）が「金属製品からみた古墳時代のまつり」という題で、報告を行いました。古墳以外からは出土例の少ない金属製品を取り上げ、祭祀遺跡で出土するセットやその性格について、北大竹遺跡をはじめとする埼玉県内の様相を取り上げながら検討しました。



新山保和氏（かながわ考古学財団）



古間果那子氏（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

さらに、隣接する群馬県の事例や福岡県沖ノ島古代祭祀遺跡の様相と比較し、その共通性や差異について考察しました。

基調報告 4

篠田泰助氏（行田市教育委員会）が「北大竹遺跡とその周辺の遺跡について」という題で、報告を行いました。今回のセミナーのきっかけとなった北大竹遺跡をはじめ、「関東の石舞台」とも称される巨大な横穴式石室で有名な八幡山古墳^{はちまんやま}を含む若小玉古墳群^{わかこだま}など、行田市内の古墳時代遺跡について、詳しい解説をいただきました。

記念講演

記念講演には、國學院大學名誉教授の梶山林継先生をお招きし、「古墳時代のまつり」という題でご講演をいただきました。先生は、古墳時代のまつりの物心両面において、中国大陸からの影響を受けた部分と異なる部分があること、それが前方後円墳の終焉や隋唐文化の流入とともに律令的祭祀に変化していくことをお話しされました。

さらには、「葬（とむらい）のまつりと神まつりの違い」、「当時の人々が何を祈り、何を願ったのか」、「まつりに用いられた道具の入手先や使用回数」、「当時の集落や豪族居館との関係」、「子持勾玉を使用す



篠田泰助氏（行田市教育委員会）



梶山林継先生（國學院大學名誉教授）

るまつりとその背景」など、北大竹遺跡の調査成果も取り入れた幅広い内容について、興味深いお話をいただきました。

ミニシンポジウム

最後のミニシンポジウムでは、基調報告と記念講演の内容を受けて、「北大竹遺跡の特徴と意義」について討議を行いました。

北大竹遺跡の特徴としては、「須恵器・土師器・模造品（石製・金属製）などの祭祀遺物の夥しい出土^{おびただ}」、「金属製模造品の埼玉県内での初の出土」、「全国最多となる子持勾玉の大量出土（これまでの出土量の約 1/10 に相当）」、「馬具や環頭柄頭をはじめとする金属製品のまとまった出土^{かんとうつかがしら}」などが挙げられ、近隣の埼玉古墳群・若小玉古墳群との関係、豪族居館との関係などが議論されました。

昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため会場での開催が出来ず、2年ぶりの対面での開催となりましたが、公開セミナーは盛況のうちに幕を閉じました。この場を借りてお礼を申し上げるとともに、今回のセミナーが「古墳時代のまつり」に対する皆様のイメージを豊かにする一助となれば、我々の目的は達成できたかと思っております。（大西 雅也）



ミニシンポジウム

台東区 元浅草遺跡

所在地 : 台東区元浅草1丁目
 調査期間 : 2022年8月～
 調査面積 : 1,800㎡

元浅草遺跡は、台東区元浅草に所在する遺跡です。東京湾奥に面した沖積平野（東京低地）に立地しており、武蔵野台地東端の上野台と隅田川が近接する場所のほぼ中間あたりに位置しています。

昭和62年に実施した都立白鷗高校地点の調査から、江戸時代の初め頃は墓地であり、その後大名屋敷となったことがわかりました。今回の調査は、昭和62年の調査地点の南側が対象で、2022年8月から開始しました。

今回の調査では、江戸時代から明治時代にかけての遺構が検出されています。特に注目されるのは、東西方向に延びる33号遺構で、間知石列に土留めのような施設を伴ったものです（図1）。現在、東西約27mにわたって検出されています。伴う遺物がわずかであるため、正確な構築年代はわかりませんが、周囲の遺構との関係から、江戸時代に属する遺構と推測されます。

33号遺構の間知石列は、2本の胴木を東西方向

に設置し、その上に北側を正面として3段の間知石を積んで構築されていました（写真1・2）。裏込めとして、黒色土に礫や木片の混じったものを埋め戻し、裏込め層の上層には褐色土を用いた整地層が確認されました。

土留めのような施設は、間知石列を構築したあと、図1の埋戻し土①を埋戻し、そこに杭と板を用いて設置されていました（写真3）。板と間知石の間には、横木にほぞ穴を設け、そこに杭を刺したものが設置されており、板や間知石を抑えていたようです。杭や板を設置したあと、間知石列との間に埋戻し土②を埋戻していることがわかりました。一方、この施設より北側には土砂の流れ込んだ様子が見られ、徐々に堆積が進んだと考えられます。

この33号遺構の機能は、水路や池の護岸など、様々なものが考えられます。整理作業を通して、詳しく検討する予定です。

（山崎 太郎）



写真1 33号遺構正面写真（北から）



写真2 33号遺構胴木の検出状況（北から）



写真3 33号遺構土留め板の検出状況（北から）

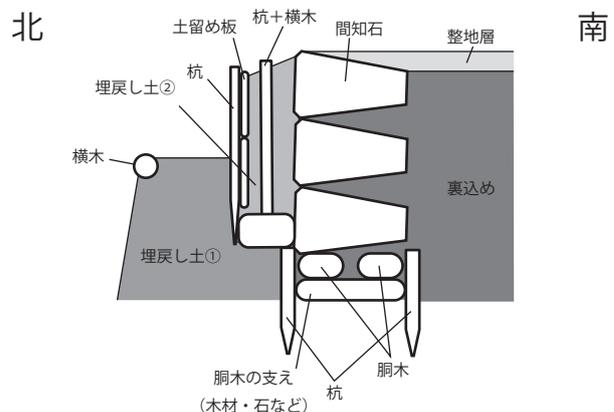


図1 33号遺構の構造の模式図

いま あの遺跡は現在！？ Vol.22

— 新川・島屋敷通り 三鷹市島屋敷遺跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。

このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。

もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

京王線つつじヶ丘駅から北へ歩くことおよそ30分、中央道を超えて少し歩くと白い建物群が見えてきます。ここは旧「新川団地」、現在は「新川・島屋敷通り」と呼ばれています。今回ご紹介するのは、三鷹市にある島屋敷遺跡です。「島屋敷」という地名は、この地に屋敷があったとする言い伝えに由来します。『新編武蔵風土記稿』によれば、遠い昔に金子時光の屋敷があり、その孫の金子弾正が天正の頃（16世紀末）まで住んでいて、その後、17世紀前半頃には徳川家康からこの地を与えられた柴田勝重が陣屋を構えたとされています。

三鷹市教育委員会と当センターが行った発掘調査ではそれらを裏付けるように、中世の建物跡や井戸、近世の廂を伴う建物跡や井戸、庭園の池跡などが見つかかり、中世から近世にかけての生活道具が数多く

出土しました。また、地下式坑や墓壇群が集中する範囲が確認され、中世には墓域としても利用されていたことも分かりました。足掛け9年にわたる発掘調査は島屋敷の台地のほぼ全体におよび、言い伝えられていた屋敷の実態解明へとつながりました。

島屋敷遺跡の周辺に目を向けると、遺跡の東側、仙川の対岸には戦国時代の山城である天神山城跡、北側には柴田勝家の兜を納めたとされる兜塚のある勝淵神社、南方には柴田勝重の菩提寺である春清寺があります。島屋敷から少し足を延ばして、三鷹市の歴史散策をしてみませんか。（小西 絵美）

◆調査成果が掲載された報告書

1998『島屋敷遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第55集 東京都埋蔵文化財センター

2003『島屋敷遺跡-第3次-』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第112集 東京都埋蔵文化財センター



写真1 現在の新川・島屋敷通り。建物の間を抜ける道は「島屋敷通り」と呼ばれている。



写真2 4度にわたる発掘調査の空中写真を合成したもので、茶色く見える範囲が発掘調査を行った範囲（一部加筆）。



写真3 団地の東側に設置されている解説板。団地内に2箇所あり、こちらは中・近世の調査成果が書かれている。

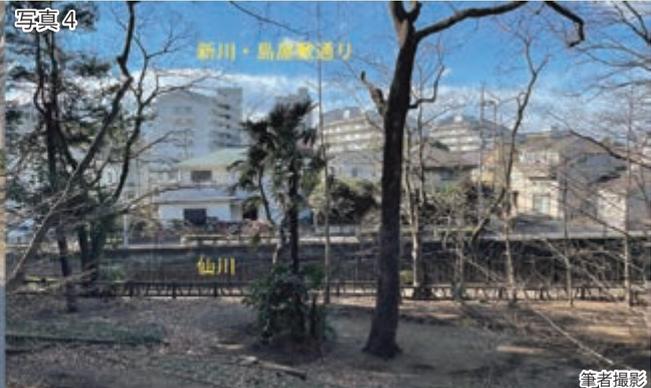


写真4 島屋敷遺跡の東側に位置する天神山城跡から仙川を挟んで新川・島屋敷通りを望む。

たま ニュータウン いせき スクラップブック 多摩新街 遺跡切抜帖

新聞にのった遺跡たち

新企画展示のご案内

都埋文センター新展示 開催中!

当センターの令和5年度企画展示が3月21日から開催されています。タイトルは「多摩新街遺跡切抜帖―新聞にのった遺跡たち―」。多摩ニュータウンから見つかった遺跡を、その発掘成果を取り上げた新聞記事とともに紹介します。入館無料、令和6年3月7日まで。

- ◆無傷で残る先人の跡 総合解明に絶好 読売新聞 昭和52(1977)年10月15日付
- ◆大量の縄文土器発見 墓穴からは耳飾りも 東京新聞 昭和58(1983)年2月4日付
- ◆古銭2万6千枚出土 戦国時代の隠し金? 朝日新聞 昭和58(1983)年11月16日付
- ◆イワシ文様の縄文土器 毎日新聞 昭和60(1985)年11月7日付
- ◆日本最古の土製仮面? 毎日新聞 平成6(1994)年2月10日付
- ◆関東で最大の尖頭器 通常の3倍 短剣に利用? 毎日新聞 昭和61(1986)年11月21日付
- ◆平安初期の木器 120点 「官」「位」などの焼き印文字 毎日新聞 昭和61(1989)年8月2日付

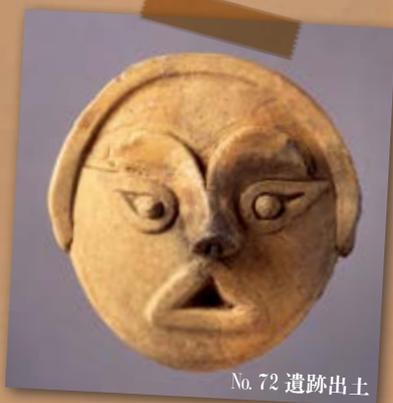
展示で紹介する新聞記事の見出しの例

発掘されたスクラップブック

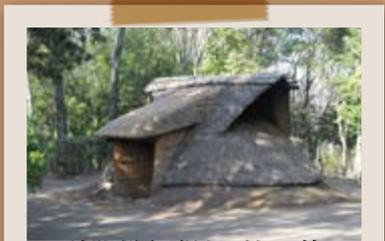
展示を企画するきっかけとなったのは、当センターの倉庫に保管されていた切抜帖(スクラップブック)でした。過去の職員が各紙の文化財に関連する記事を切り抜いて集めていたものです。東京のベッドタウンとして大規模開発された多摩ニュータウンからは、最終的に964カ所もの遺跡が発見されています。当時、その発掘調査成果の一部は新聞記事に取り上げられることもありましたが、そうして注目を集めるような遺跡があることは、数十年経った今、忘れられつつあります。展示では特に注目された遺跡を取り上げ、多摩ニュータウン遺跡群の価値に再び光を当てます。各記事と出土品を合わせて展示しています。

常設展示に関わる
記事も展示します

実は出土したとき
記事になっていました→



No. 72 遺跡出土



遺跡庭園「縄文の村」A棟

「ここにそんな遺跡が?」

当展示では、遺跡をより身近に感じてもらえるよう、各遺跡の位置と現況写真を用意しました。「ここにそんな遺跡が?」という驚きと共に、ぜひ多摩ニュータウン遺跡群に親しんでください。

越え、学術的にも大変価値の高いものであったという事です。それは極めて大規模な範囲を綿密に調査したことや、開発を逃れ、保存状態のよい遺跡が多かったことによります。近所にお住まいの方はもちろん、ぜひ多くの方にご来館いただきましたと思います。

←敷石住居の発見も記事にのりました

関連行事にも乞うご期待
会期中には、当センター学芸員による解説会や、展示テーマに関連する講演会の開催も予定。詳細は順次ウェブサイトで公開します。(宮本 由子)

※今号の表紙：当館の倉庫に保管されていたスクラップブック



たまのよこやま 132
東京都埋蔵文化財センター

2023年3月31日発行

〒206-0033 多摩市落合1-14-2 TEL 042-373-5296 <https://www.tef.or.jp/maibun/>

(ホームページ URL は 2023年4月1日に変更となります。)

